

<見学会>

中央鉄道学園見学記

佐々木 享

技教研大会の終わった8月5日午後、希望者17名で、2時半からの短時間、国分寺にある国鉄の中央鉄道学園を見学した。本館で教務課長さんの説明を受けたあと、時間の許す限り構内の諸施設を見学した。

国鉄職員の教育訓練は、教育方法によって職場内教育、教育機関教育、外部への委託教育に区分されている。中央鉄道学園は本社直轄の施設で、教育機関としては他に各総局あるいは鉄道管理局管轄の鉄道学園（第1種8か所、第2種22か所）、鉄道病院付属の高等看護学園がある。中央鉄道学園は最も大きな施設で、分校である三島技術学園と合わせて年間教育人員約9,000人に達する。

ここでは、以下のような教育が行なわれる。

1. 研修課程 各種幹部職員の再教育の課程。期間は3～27日
2. 研究課程 幹部候補者として採用された者の正規教育。大卒は2期計3か月、高専卒は3期計9か月。来年度は新規採用がないのでこのコースは開講されない。
3. 大学課程 高卒職員中の優秀な者を幹部要員にするための正規教員。期間3年。業務、機械、土木、建築、電気の5科があり、現在450名が在籍している。大学教授の外来講師が多く、内容が充実しているため、ここを卒業すると鉄道内部では大卒に処遇される。
4. 高等課程 現業部門の初級幹部職員のためのコースで、①養成のための正規教育（期間1～4月）、②職務内容又は作業方式の変更に伴う転換教育（0.75～2.25月）、③レベルアップのための再教育（0.3～4月）がある。それぞれ多くの科に分かれている。
5. 普通課程 現業部門の中級職員のためのコースで、①養成のための正規教育（0.75～

11月）、②転換教育（0.75～9月）、③再教育（0.5～2.25月）があり、それぞれ多くの専門科に分かれている。

6. 初級課程 現業部門の初級職員の新規採用時の正規教育（1～1.5月）

22万㎡（約7万坪）の緑に囲まれた構内に、本館（事務室等）、教室棟7棟（教室61、その他実験室等）、実習館7棟、図書館（蔵書数約12万冊）、運動場、プール等の体育施設があり、大学課程の生徒や各種の研修生のためには生徒寮10棟（1,636名収容）、研修寮1棟（126名収容）も設けられている。

私たちは本館での説明のあと、第1車輛実習館の一隅でまず新幹線運転手養成用のシミュレーションによる実習の説明を受けた。ノッチを握らせ、操作させてくれたので、ここ
（次ページへ）

見学後に大学課程のカリキュラムをいただいたので下に要点（3年間の総時間数）を掲げる。詳細を希望の向きは技教研事務局に連絡して欲しい。

	機械科	業務科
一般教育	920	840
外国語	340	680
保健体育	220	220
専（基礎）	2,040	1,520
門（応用）	790	—
教（鉄道専門教育）	—	1,020
卒論研究	220	120
卒業設計製作	130	—
現場実習	120	240
学級経営	60	60
準備学習期間	440	580
総計	5,280	5,280

で予想外に時間を食い、このあと、昨年完成したばかりの鉄筋3階建の総合実習館に入り、19の実験室又は実習室のかかなりの部分を大急ぎでみて廻った。専門的なことが多くてよく

はわからないが、新しいだけにそれぞれ広い部屋に機器類がよく整えられているように思われた。

(名古屋大学)

第15回全国大会をふり返って

台風の影響で東海道線、新幹線がマヒ状態になり、来られない方が出たり、ドロボーさわぎがあったりして、一時はどうなることかと思いましたが、成功のうちに第15回大会を終えることができましたことをまずよろこびたいと思います。

大会の組織面を見ますと、参加者の一覧表を掲げましたが、全体で80名の参加者で、これは昨年の79名に次いですくない数です。特に中学校は16名で、しかもそのうち8名が東京、埼玉が3名で、その中には常任委員も含まれていますから、これは中学のみをとってみれば、ほとんど全国大会の実体ができていないような状態です。参加者の一覧表を年度をさかのぼって見てみますと、大会参加者のすくなくなっている主な原因が中学校教師の参加の減少にあり、それが昨年度、今年度と続いていることがわかります。つまり、中学校での校内暴力などの問題の多発化の時期と中学校の先生方の大会への参加の減少が照応しているようです。

中学生たちが荒れて、授業そのものが成り立たないという状態では、技教研へ行くより例えば全生研へということがあったのだといえるかも知れません。その意味では、参加者の減ったことはある必然性があったといえるかも知れません。しかし、今年の大会でも出されていましたが、通常とは異なるクラス編成で、男子ばかりを45人以上という授業をしなければならぬ技術科では、授業を成立させるための困難はより一層大きいわけです。私たちの会の活動が、今日の中学校における困難のなかで技術科教師がかかえているむず

かしさに、適切にこたえきれていたかどうかを考えてみることも必要ではないかと思いました。

今日の荒廃している中学校教育の現実、生活指導としてではなく、技術科教育としてどうとり組むのが、今大会の小・中学校の技術教育分科会の中心テーマであったわけですが、この点で、重要な前進があったと思います。つまり困難な状況の中で、物を作らせる授業でない授業が成立しない、座学なんてとてもという風潮が、学習指導要領の改悪にも影響されて現場でひろまっているが、こうした路線からは何の展望もひらけないこと、どんなに困難でも、すべての子どもに、技術学と技能の基本をわからせることを目標にかかげ、今の中学生の現状にあわせて、教材の工夫、半学級の実現などの必要なあらゆる手だてをつくすことのなかに展望があるだろうことが確認されたことです。これは、私たちの中心の課題が、「やる気になって、楽しくわかり、できる」という技術の授業の創造にあるということだと思えます。参加者は少なかったのですが、出された実践は、困難な現実にくじけず、色々と工夫をこらしてまともな技術教育をめざすもので、参加者には大きな励みとなりました。

高校、職業訓練校、高専の技術職業教育分科会では、始めて、詳細な授業記録を付けた授業実践報告がなされ、授業のなにかを含めた細かい検討がされたことは大きな成果で、こうした授業の検討のしかたを私たちの中に根づかせねばとあらためて思われました。

この分科会に出た人のアンケートに、「初